〈展示会〉

孫文と長崎

北九州市立大学大学院教授　横山宏章

【司会】 それでは再開させていただきます。3番目のご講演者は北九州市立大学大学院教授の横山先生です。ご講演の題は「孫文と長崎」です。横山先生のご専門は中国近現代史ということでいいと思いますけれども、特にご著書の中で本日の講演と関係のありますところは、『長崎が出会った近代中国』、あるいは『孫中山の革命と政治指導』、さらには『孫文と袁世凱』などです。特に横山先生は孫文ならびに陳独秀研究の第一人者であります。では横山先生、よろしくお願いします。

【横山】 ただいまご紹介いただきました横山でございます。今日は神戸の皆様方に孫文のお話ができるのを非常に嬉しく思っております。安井先生の「孫文と神戸」に続きまして、今日は「孫文と長崎」というお話をさせていただきたいと思います。

私は6年間、長崎の大学で教えていた時に、長崎華僑の方々と知り合いました。長崎華僑の方々と一緒に、『孫文と長崎』という、今日のタイトルと全く同じですが、写真を中心にした本を編纂しました。2003年に出版しましたから、もう6年前になります。この本を中心に、長崎での孫文について、少し紹介をしていきたいと思います。

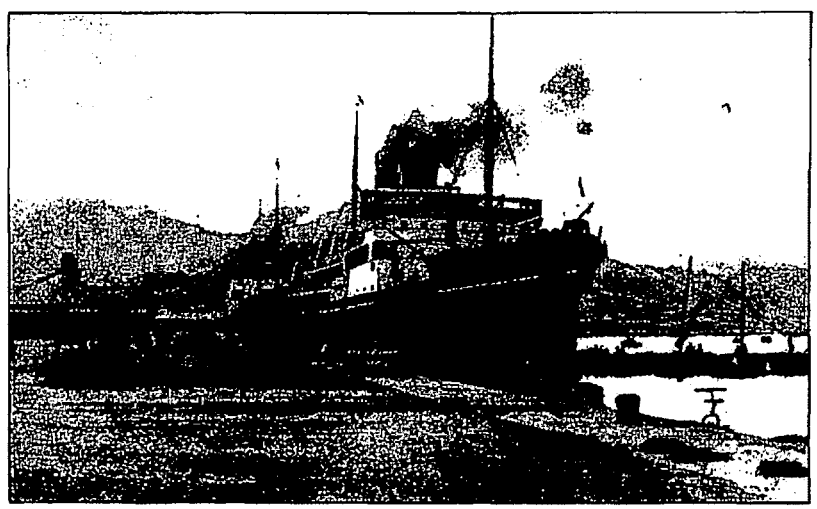
私は1999年に、県立長崎シーボルト大学という新しい大学の開校のために着任いたしました。それまでは東京の大学で長く孫文や陳独秀などの研究を進めていたわけでありますが、初めて地方（と言う言い方は失礼ですが）の長崎に来ました。そこで抱いた最初の疑問は、「孫文はこの長崎に何回来たのだろうか」ということでした。長崎の関係者に聞いても「何回来たかよく分からない」という返事でありまして、知り合った長崎の華僑、あるいは長崎の華僑・華人史を調べております陳東華さんという方に聞いても、「いやあ、確かな数は、分からないんだよなあ」という次第でございました。

そこで、私は自称孫文研究者でございますので、じゃあ孫文は長崎へ何回来たのか、ちゃんと確定をしましょうということで、調べ始めたわけであります。長崎の人が知らないということは、たぶん長崎での文献を調べた限りでは何回か分からないということだろうと思いまして、外交文書だとか、孫文と仲がよかった宮崎滔天の全集とか、あるいは孫文の著作などから調べていく以外にありません。その結果、私の勝手な「横山説」として確定したのが、皆さんにお配りしたものの一番上にある「孫文来崎表（1897年～1924年）」のような「9回来崎」説です。これは決して定説ではないので、誰かによって崩されるかも分かりませんが、今のところ、長崎でも9回と言われるようになりました。先ほど神戸には18回、合計50日余り滞在されたという話がありましたが、長崎は神戸の半分ですね。

実は、長崎にはそんなに長くは滞在しておりません。あまり大声では言えないのですが、長崎華僑は孫文には冷たかったようです居心地が悪かったのかもしれません。後からその辺の経緯は述べ

孫文来崎表（1897年～1924年）

	年 月 日	移動経路	船 名	同行者・面会者	
1	1897.11	熊本→東京		陳少白、宮崎滔天、渡邉元	熊本・荒尾訪問の帰り
2	1900.6.11	横浜→香港	仏インダス号	宮崎滔天、内田良平	恵州蜂起の準備
3	1900.8.26	横浜→上海	神戸丸	内田良平、平山周	恵州蜂起の準備
4	1900.9.3	上海→東京	神戸丸 長崎から汽車	容閎、内田良平、田中侍郎	上記の帰り
5	1902.1.24	横浜→香港	八幡丸	鄭弼臣（？）	目的不明
6	1907.3.5	横浜→香港	独プリンス・アリス号	ニコライ・ラッセル、金子克己 萱野長知、池亨吉、汪精衛	国外追放で出国
7	1913.2.13	上海→東京	山城丸 長崎から汽車	戴季陶、山田純三郎、宮崎滔天	鉄道資金の借款交渉
8	1913.3.21 ～3.23	東京・熊本 →上海	長崎まで汽車 天洋丸	戴季陶、宮崎滔天、鈴木天眼、 金子克己、その他大勢	上記の帰り
9	1924.11.23	上海→神戸	上海丸	李烈鈞、戴季陶	北上の途中



94. 出島岸壁の出島駅と上海丸と長崎丸（日華航路開通は1912年2月）　長崎文献社蔵

ますが、まあそういうことでお手元の表にありますように9回と確定したわけでございます。

長崎に9回来たと言いながら、実はちょっとオーバーな表現でございます。もともと長崎には上海と繋ぐ連絡船の定期航路があって、上海丸と長崎丸という二つの船が行ったり来たりしていたわけであります。今はほとんど飛行機で中国に行きますが、当時は中国に行こうとすれば、もちろん神戸から船で中国に行く、あるいは横浜から船で中国に行くケースもありましたが、長崎からが中心です。仮に東京の人が中国に行く場合も、長崎まで汽車で行って、長崎で連絡船に乗船して上海に行くというのが一般的でありました。日本から大陸に行く人、大陸から日本に来る人は、日本人も中国人も長崎は必ず通過しておりました。

そこでパワーポイントに「ちょっとだけ長崎滞在」という項目を作ったのですが、孫文もちょっとだけ長崎にいたケースがたびたびありました。これも1回に数えないと、回数が増えないということで、堂々と回数に入れました。安井先生の話を聞くと「いや、神戸もそうでね」ということで、「ちょっとだけ神戸滞在」も18回の中に入れられたということです。2回目と3回目は1900年に来ておりますけれども、2回目は長崎から同行する日本人の同志を船上で迎えたにすぎません。宮崎滔天や内田良平が長崎から船に乗って、孫文と合流しております。3回目は昼に上陸いたしまして、長崎の遊郭に有名な丸山町というのがございますが、そこの鹿島屋というお店に芸妓さん2人を呼んで昼食を済ませ、そのまま船に戻ったというケースも、長崎滞在に入れております。あるいは、6回目は1907年とありますが、孫文はドイツのプリンス・アリス号という船上で長崎在住のロシア亡命政治家でありますニコライ・ラッセルと会談をしております。これは船の中でずっと夜を徹して会談をしたということです。だから上陸はしておりません。このような大きな船の場合は、船がホテル代わりになっていました。このような「ちょっとだけ長崎滞在」というのも入れて、合計が9回ということになったわけであります。先ほど長崎遊郭の鹿島屋というところで食事をしたと言いましたが、この写真が当時の丸山町の遊郭です。江戸時代から続いた日本三大遊郭の一つで、写真の一番奥の左側が鹿島屋です。

では本格的に長崎に滞在したのは何回かと言うと、たったの2回しかない。1回目が1897年の11月です。神戸は1895年が第1回目というお話をされていましたが、その2年後です。この1回目は、「無名の英雄」と言って、宮崎滔天が非常にお世話になった渡邉元（はじめ）との出会いであります。渡邉元の家に泊まっていましたが、何日いたかはよく分かりません。これはあくまでも宮崎滔天の書かれた文章の中から確認できるわけでありまして、それ以外に資料がないので正確なことはよく分かりません。

ちゃんと滞在した2回目は、8回目に当たる1913年の3月です。先ほど神戸でもお話が出ましたが、孫文が中華民国の建国の英雄として、辛亥革命後に日本に来た時のことです。まず一旦は長崎に上陸し、そこから汽車で東京に向かいました。東京で政府関係者といろいろな交渉をし、帰りに再び長崎に寄っています。その時、2泊3日も長崎に滞在しています。2泊3日の長崎滞在を、私は長い滞在と計算させていただいております。その2回だけが、言わば本格的な長崎滞在でございます。

最初の1897年は、日清戦争の後でございます。孫文は宮崎滔天に連れられて、初めて長崎を訪れ、渡邉元と知り合いました。当時の孫文と渡邉元が一緒に写っている写真がないので、当時の長崎市街地の写真をご紹介しておきます。映像は、翌年の1898年という年号が確定している長崎居留地の写真でございます。ちょっと小山の高い森の辺には西洋館が建っているのがお分かりかと思います。手前のほうは普通の日本家屋であります。神浦川が流れ、その先は長崎の港であります。船が

多く碇泊し、大型の船もあります。長崎へ行かれた方はお分かりだと思いますが、グラバー園へ行く電車の駅付近の写真です。ここから橋を渡ってグラバー園の方に行きます。この辺にちゃんぽん料理の発祥地といわれる四海楼というレストランがあります。これは色が着いておりますが、たぶん後から色を着けた写真だと思います。孫文とは関係ない写真ですが、だいたいこういうような感じの長崎に孫文が来ました。

この1回目に会ったのが渡邉元という人です。この人は長崎で炭鉱主をしていました。ほとんど世には知られていない人ですが、孫文と日本人の名簿を作る時には、ぜひとり上げていただきたいと思います。私は渡邉元の伝記である『草莽のヒーロー』という本を書きました。彼はもともと孫文が来る前に韓国の改革派（開化派）の金玉均を、これも秘かに世話をしていました。金玉均が上海で暗殺され、東京で行われたその葬儀で、宮崎滔天が渡邉元の存在を知りました。宮崎滔天が渡邉元に、俺を支援してくれという形で、2人の交流が始まります。そして宮崎滔天が孫文を連れて、ふるさと熊本の荒尾に行った帰りに、長崎にわざわざ寄っています。渡邉元を紹介するためです。彼の家で孫文と宮崎滔天が滞在をしています。宮崎滔天に言わせればこの渡邉元は「無名の英雄」で、表には出ないけれども非常に革命派を助けてくれたということであります。当時長崎で炭鉱開発に従事していて、成功した時は非常に羽振りがいいのですが、失敗もたびたびしまして、孫文が袁世凱に敗れた時に、「残念でしょうがない。俺がもし炭鉱の開発に成功して大金持ちになってたら、孫文に絶大な資金の支援をして、袁世凱などに敗れないような政府を作ってあげられたのに」と嘆き、「できなかった、残念だ」ということを宮崎滔天に語ったということです。

その時に孫文は宮崎滔天と、ある禅寺に行っております。そこのお坊さんが仏教の法典から「白浪滔天」という言葉を紹介したので、その言葉を受けて渡邉元が「滔天ってなかなかいいじゃないか。宮崎、お前これから滔天と号しなさい」と言ったので、それ以後宮崎滔天となったと言われております。それまでは宮崎寅蔵という名前でありました。私は長崎にいる間、その寺はどこだろうかと、長崎の郷土史家の方と一緒になって一生懸命探しました。菩提寺（固有名詞です）、晧台寺、福済寺、この3つの禅寺のどこかであることは間違いないんですが、福済寺は原爆で焼けて記録が残ってないということもあって、確定はできませんでした。

長崎で『東洋日の出新聞』を発行していた鈴木天眼宅前で孫文たちが写った横長の写真があります。孫文の縁に立つ鈴木天眼と宮崎滔天の2人は仲が良くて、一緒に革命派を援助しています。1913年3月の写真です。これは孫文が熱狂的に迎えられた時のことであります。1912年の1月に中華民国が誕生して孫文は初代臨時大総統となり、同年3月には袁世凱に臨時大総統の座を譲位いたします。その翌年の、まだ袁世凱と関係が良い時に、孫文は鉄道の建設資金を調達するために日本政府との交渉に来日し、帰りに長崎を訪問したわけであります。この時は非常な熱狂ぶりで、真中のシルクハットをかぶった孫文の隣に鈴木天眼の夫婦がいます。手前から3人目の背の高い人が宮崎滔天であります。天眼の隣のちょっと背の小さい方は西郷四郎と言いまして、空中投げの「姿三四郎」のモデルになった柔道家であります。西郷は長崎で『東洋日の出新聞』の新聞記者をしておりました。その隣が先ほど名通訳と言われました戴季陶（戴天仇）であります。この写真に写っている13人全員の名前が分かっていますが、この全員の名前を確定したのは私が初めてじゃないかと思います。一生懸命に他の写真と照合しながら、一人ひとり確認して、全員の名前を確定いたしました。

それまではけっこう孫文は長崎に冷たかったのですけれども、鈴木天眼を表敬訪問したというの

は、宮崎滔天達を通して、革命派を援助してくれた言論界のスター（と言ってもまあ地方の新聞の親玉でございますが）であったからです。その扱いに感謝して表敬訪問をしております。その場所には、現在小さい碑が立っております。その時、孫文は長崎の誇る三菱造船所を訪れています。

もともと孫文は清朝打倒の言わばテロリストで、清朝から指名手配されて首に賞金がかかった人ですから、清末の革命家時代は、なかなか彼を歓迎するということはできなくて、華僑も歓迎しなかった。そうした厳しい状況の中で、唯一宮崎滔天や鈴木天眼達は支援をしてくれた。今回の訪問は中国政府の代表者で、もと国家元首であるわけですから、堂々と活動し、長崎の造船所にも行っております。ここにある写真は、その埠頭で撮った写真だと中国の本には書いてあります。永豊艦という中国の砲艦が造られた直後に行ったわけです。永豊艦というのは、その後に政治的なドラマの主役になり、最後は孫中山の名前を取って中山艦と呼ばれた砲艦です。それが三菱造船所で造られたばかりの時に、彼は訪れています。その前にも神戸で川崎造船所を訪れています。彼は天下を取って、これから国を強化するためには軍艦が必要である、海軍を整備しなければいけないということで、日本側の軍艦製造能力を確認するためにも、各地を回っていたわけであります。

この時は先ほど言いましたように、長崎でも大歓迎をされました。長崎の唐人屋敷というのは皆さんもご承知かと思います。江戸時代の出島には、オランダ商館があってシーボルトなどが滞在していましたが、中国貿易で来られた唐人が住んでいたのが唐人屋敷です。その跡地には福建会館というのが今もございます。この写真は、そこに集まった長崎在住中国人の方々との記念写真であります。孫文と長崎華僑がにこやかに一緒に撮っているのは、この時だけでございます。真中に孫文がいまして、中国服を着ているのは地元華僑の方々だと思います。ネクタイをしているのは、たぶん中国から来た随行員だと思います。

現在福建会館の前の広場、すなわち先ほどの写真が撮られた地点には、2001年に上海市から贈られた孫中山像が建てられております。長崎に来られた折はぜひこの唐人屋敷跡、福建会館に立ち寄っていただきたいと思います。この写真は鳳鳴館での集合写真。先ほど丸山町の遊郭に鹿島屋というのがあるとお話しましたが、その隣には花月楼という有名な料亭がありまして、坂本龍馬などが酒を飲んで騒いだというところでございます。その裏側、庭の上側にありましたのが鳳鳴館で、当時の県知事、あるいは市長や地元の名士達との記念写真でございます。

孫文は神戸からの帰りに宮崎滔天のふるさと荒尾に寄り、最後に船に乗るために長崎に向かいました。その時、長崎県知事が諫早というところで孫文の列車に乗り込んで、長崎まで一緒に行ったという大歓迎ぶりでありました。当時孫文がいかに著名であり、熱狂的に迎えられたかということがお分かりになると思います。これは長崎県長崎市商工会の関係者の写真であります。このあと23日に天洋丸という船に乗って長崎を離れました。

最後の訪問は1924年の11月23日です。先ほど紹介されました神戸で「大アジア主義」演説がなされた時の旅です。この時はすでに病魔に侵されていましたが、上海から長崎に上陸し、神戸に行きました。東京には行けずに、そのまま天津から北京に向かうという形になるわけです。その最後の日本訪問の時には、長崎では船から下りることなく長崎港の船上で記者会見をしています。ここでは中華民国を左右するのは国民の力であるということを演説し、神戸での有名な演説である大アジア主義の原型が、長崎でも語られたと言われております。

この機会でありますから、孫文の仲間達と長崎の関係を簡単に紹介しておきたいと思います。

まず孫文の片腕と言われた黄興でございます。黄興は1909年の1月に、宮崎滔天と一緒に鹿児

島の西郷隆盛のお墓を見た後、長崎に来ております。先ほど紹介しました『東洋日の出新聞』の西郷四郎（いわゆる姿三四郎）と酒を飲んでおります。宮崎滔天も酒が大好きで、この時の記録によりますと、連日酒びたりということで、黄興も一緒に飲んでおりました。この長崎訪問は外交文書にも記録がありまして、外交文書と宮崎滔天の記録はほぼ一致するから、間違いありません。その後、ある人の回想によりますと、長崎の有名な芸者である愛八が登場します。なかにし礼の小説「ぶらぶら節」の主役で、映画では吉永小百合が演じた愛八が、黄興のお世話をしたということです。これは本当か嘘かよく分からないのですけれども。回想によれば、黄興は一生懸命いろいろな詩を書いて愛八にあげた。愛八はそれがかの有名な黄興であるというのは全然教えられていなかったので、他の人に多くの書をあげてしまった。革命が成功して中華民国が誕生した時に、あの人が実は黄興だったんだよと言われてびっくりして、ああ、あげなければ良かったなと思った、というような話があります。

それから第二革命。孫文が袁世凱に反乱をした第二革命では、軍事蜂起した国民党系都督の柏文蔚と李烈鈞の２人が有名です。柏文蔚は1913年の８月の末から1915年の５月まで、長崎で亡命生活をしておりました。第二革命の敗北で、いろんな人が日本へ亡命をいたします。ほとんどの人が先ずは長崎に上陸するのですが、その後は各地に散らばっていきます。孫文はこの時は長崎に上陸していませんが、長崎に上陸した柏文蔚はそのまま長崎に居を構えて、亡命生活を開始しました。外務省の記録によれば、長崎に21人の亡命者が存在して、亡命者コミュニティーを形成していました。家族を含めますと43人です。李烈鈞は京都に亡命したのですが、奥さんを長崎に呼んでおります。そこで長崎に李烈鈞がやって来て、長崎の郊外の温泉で柏文蔚と会合を重ねております。その頃、ちょっと黄興、李烈鈞、柏文蔚の３人と孫文の関係は悪くなりまして、孫文が東京で中華革命党を結成した時、彼等は合流しておりません。そして独自な対応をとるわけです。そのような複雑な時期に、長崎にも亡命者コミュニティーが、だいたい２年近く続いていたということは、あまり知られていないようです。

それから「蔣介石と長崎」をご紹介いたします。1913年の９月に第二革命に失敗して次々と亡命を繰り広げるわけでありますが、外務省の記録によりますと、1914年５月の段階で長崎を通過した亡命者、第二革命に敗れた亡命者は260名に上るということが明らかになっております。もちろん奥さんや子供を連れて亡命している人も多いわけですが、その家族は数に入れず、純粋に軍人が260名亡命したということであります。その１人が蔣介石です。蔣介石がこの時、長崎の新聞に受けたかなり長いインタビューが記事にされております。日本語でしゃべったのかどうかはよく分からないのですけれども。と言うのは、ご承知のように蔣介石はもともと日本に留学しておりまして、新潟の高田の部隊に軍人として勤めていました。辛亥革命が起こったので秘かに休みを取って、勝手に中国に戻って、そのまま革命に従軍しました。日本の軍律から言えば逃亡した人間なのです。その後、一国の親分になりましたら日本の陸軍も文句を言わなくなりますが、長崎に舞い戻ったこの時に、新聞社のインタビューを受けております。彼は自称准将と、かなり高い地位を言っていますが、その頃はまあたいしたポストではなかったのですが、大物ぶったのでしょうか。１週間ほど滞在して東京へ出ております。

もう一つ。1927年の９月に蔣介石は島原半島にある雲仙温泉と、その下にあります小浜温泉へ３泊ほどしております。1927年とは、もう国民革命が華やかな時で、国民革命軍総司令として蔣介石が指揮した北伐戦争で、長江（揚子江）以南の中国を支配した時の最高指導者ですから、蔣介石はもう非常に有名な段階です。全ての新聞で、島原

半島における蔣介石の毎日の記録が明らかになっております。ここで3泊した後、神戸に向かっております。この時は、宋美齢との結婚の許しをもらうために、宋美齢の親に会うために来日したと言われています。ところが、この時の蔣介石は、新婚旅行で宋美齢を連れて雲仙と小浜に来たと、当地のホテルのパンフレットに、そう書いてあるのです。

その時、実は蔣介石の秘書が雲仙のホテルで結婚式を挙げ、花嫁さんを連れて小浜温泉にも来ました。蔣介石も一緒にそこで泊まっていて、ホテルの主人へ書を書いてあげたのが、今もその温泉に残っております。それは秘書が花嫁さんを連れてきたのであって、宋美齢を連れてきたわけではないのです。当時、宋美齢はまだ上海にいました。ところがやっぱり伝説というのは面白いもので、そういう話が膨らんで、いかにも蔣介石が宋美齢と新婚旅行に来たというような話が、まことしやかに伝わるのです。前日に泊まった雲仙温泉のホテルにもお電話をしたら、「私達もそういう話を聞いています」という返事でした。雲仙や小浜では、まるで蔣介石が宋美齢を連れて新婚旅行で来たというような伝説になっております。

長崎華僑と危険な革命派との関係でありますが、お尋ね者のテロリスト時代の孫文と地元の長崎華僑とは関係を1度も持っておりません。孫文が長崎に来た時に関係しているのは日本人ばかりであります。国粋主義者として有名な内田良平とか、どちらかと言うと戦前の大陸浪人派の連中、あるいは頭山満のグループとかそういう人達であって、華僑とは関係はありません。ところが1913年のように権力者となって公に存在が認められた時の孫文は大歓迎されております。第二革命に失敗して先ほどの柏文蔚を中心にした亡命者のコミュニティーが長崎にできますが、その亡命革命派に対しては、長崎華僑は一切支援をしておりません。危険な亡命革命派であるからです。支援がない亡命中国人は生活に困り果て、持っていたものを売ったりしながらの生活を余儀なくされたということです。

長崎華僑は袁世凱が臨時大総統から正式の大総統になった時、提灯行列をして袁世凱就任を祝っています。それに歯向かって第二革命に失敗した革命派に対しては、関係を持ってないということが明らかになっております。長崎の人々は権力や体制に迎合する性格を持っていたのでしょうか。神戸や横浜の華僑の方とはちょっと性格が違うようです。「何でそうなのだろう」ということを、現在の長崎の華僑の方といろいろ話してみました。たぶん長崎には古く清国時代から中華民国にかけて、領事館がございました。今も中国の総領事館があります。長崎県を除く九州の事務は全部福岡の総領事館が行なっておりますが、長崎の総領事館は、わずか長崎県だけの仕事をしています。日本に総領事館は多いですが、1県だけを担当すると言う、そのような特殊なのは長崎にしかありません。総領事館というのは数が限られていますから、長崎の総領事館はやめて、その分のコストを他の大都市に動かしたいという要望はあるのですが、日中関係の最初の窓口という歴史的な経緯がありまして、今も長崎に小さな総領事館があります。そのように長崎の領事館が清朝時代から長崎華僑を直接的に管理していました。神戸の華僑世界や横浜の中華街の中国人に比べて、長崎の中華街の中国人は数が少ないようです。オールドカマー、昔の華僑は、今も90何世帯だそうです。中華商工会に加盟しているのは90何軒と聞いております。数が少ないから、一人ひとりの華僑の行動が領事館によって監視されている、把握されているということが言えるんじゃないだろうかと思います。むしろそのような亡命コミュニティーの中国人革命派については、『東洋日の出新聞』の鈴木天眼など日本人のほうが支援した形跡があるわけでありまして、残念ながら長崎華僑は、政治的な亡命者や、袁世凱政権から逮捕状が出てるような危険な人物には関わりたくなかったのじゃ

ないかと思います。

最後に、私が関係した本のことを紹介させてください。渡邉元につきましては『草莽のヒーロー』として長崎新聞社新書で出しています。調査を開始した時、長崎の県立図書館の担当者に聞いても、最初は「渡邉元に関する史料を出してください」と尋ねたら、「渡邉ゲンって誰だ」という返事でした。長崎の人が誰も知らなかったという人物であります。その人の伝記を書いております。亡命中の柏文蔚につきましては『長崎が出会った近代中国』海鳥社に書いています。先ほど長崎の三菱造船所の紹介でお話しました中山艦の歴史につきましては『中国砲艦「中山艦」の生涯』汲古書院という本を出しております。それから、長崎文献社から『孫文と長崎』という本を出しております。私は別に長崎の代表者じゃありませんが、もし長崎に旅行される機会があって唐人屋敷を訪れましたら、孫文の銅像があります。なぜこのようなところに孫文の銅像があるのかと言えば、先ほどのお話の由来で上海市から贈られたものでございます。間もなく長崎では旧正月、すなわち春節にランタンフェスティバルというのがあります。まあ神戸の方は長崎に行かなくてもそういう雰囲気は味わえるかも知れませんが、長崎もよろしくお願いします。どうもご清聴ありがとうございました。

【司会】 それではまた何か事実関係等についてご質問がございましたら、お1人様からお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか…。特にないようですので、また改めて最後に4人の先生方に前へ出ていただきまして、質問の時間を取っていただきます。どうも横山先生ありがとうございました。

≪講師略歴≫

横山宏章

1944年　山口県下関市生まれ。

学歴：一橋大学法学部卒業。
一橋大学大学院法学研究科博士課程中退。
法学博士（一橋大学）

職歴：朝日新聞記者。
明治学院大学法学部教授。
県立長崎シーボルト大学国際情報学部教授。

著書：『陳独秀の時代』慶応義塾大学出版会。
『中国の異民族支配』集英社。
『中華思想と現代中国』集英社。
『長崎が出会った近代中国』海鳥社
『孫文と袁世凱』岩波書店。
『中華民国』中央公論社。
『孫中山の革命と政治指導』研文出版。
その他多数

2009年11月3日　神戸国際会議場

孫文――神戸、長崎そして東亜同文書院・愛知大学

孫文と長崎

横山宏章（北九州市立大学）

長崎の孫文と私の出会い

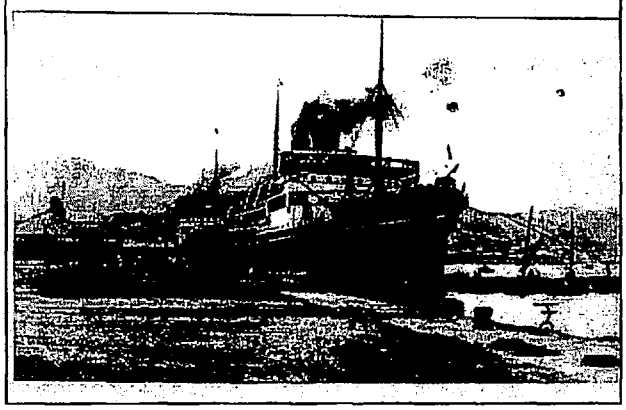
写真誌『孫文と長崎』（長崎中国交流史協会編）の編纂
2003年2月発行

「孫文は長崎に何回来たのだろうか？」

孫文来崎表（1897年～1924年）

	年月日	往路経路	船名	同行者・面会者	
1	1897.11	熊本→東京		梅屋庄吉、宮崎滔天、萩原元	熊本・東京間の帰り
2	1900.6.11	横浜→香港	仏インダス号	宮崎滔天、内田良平	恵州蜂起の準備
3	1900.8.28	横浜→上海	神戸丸	内田良平、平山周	恵州蜂起の準備
4	1900.9.3	上海→東京	神戸丸 長崎から乗船	宮川、内田良平、田中伊郎	上海の帰り
5	1902.1.24	横浜→香港	八幡丸	梅屋庄（？）	日帰り旅
6	1907.3.5	横浜→香港	独プリンス・アリス号	ニコライ・ラッセル、犬子義之、宮野長輔、梅屋庄、汪精衛	国外追放で出国
7	1913.2.15	上海→東京	山城丸 長崎から乗船	梅屋庄、山田純三郎、宮崎滔天	長崎貴金の帰京支援
8	1915.3.21 ～3.23	東京・熊本→上海	長崎まで乗船 大洋丸	梅屋庄、宮崎滔天、鈴木天眼、犬子義之、その他大勢	上海の帰り
9	1924.11.23	上海→神戸	上海丸	李烈鈞、梅屋庄	北上の途中

上海と長崎の連絡船



ちょっとだけ長崎滞在

2回目、1900年　長崎から同行する日本人同志を船上で迎えた

3回目、1900年　長崎に上陸したものの、長崎の遊郭として名高い丸山町の鹿島屋で、芸妓2名を呼んで、昼食を済ませただけ

6回目、1907年　船上で長崎在住のロシア亡命革命家ニコライ・ラッセルと会談

長崎遊郭の丸山町

坂下の奥が鹿島屋

本格的な長崎滞在

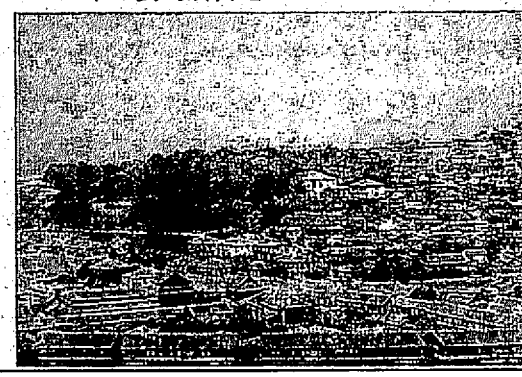
わずか2回だけ

1回目の1897年11月
「無名の英雄」渡邉元との出会い

8回目の1913年3月
中華民国の建国英雄としての孫文　大歓迎

初めての長崎　１８９７年

1898年の長崎居留地



１８９０年代の長崎居留地

炭鉱主　渡邉元とは？

渡邉元と宮崎滔天

韓国開化派の金玉均を世話

宮崎滔天の渡邉元評価
「無名の英雄」と絶賛

拙著『草莽のヒーロー』長崎新聞新書

白浪滔天

1897年11月、孫文、陳少白、宮崎滔天が長崎の渡邉元宅に滞在

長崎の禅寺で「滔天」の号を授かる
宮崎寅蔵から宮崎滔天となる

禅寺は何処か？　菩提寺、晧台寺、福済寺

宮崎滔天と鈴木天眼

熱狂的に迎えられた孫文

1913年3月の孫文

1912年1月　中華民国誕生　初代臨時大総統
1912年3月　孫文が袁世凱に譲位
1913年3月　鉄道建設資金調達へ日本政府と交渉

この帰りに長崎を訪問

鈴木天眼宅を表敬訪問

14. 鈴木天眼宅を訪れた孫文一行 1913年3月22日

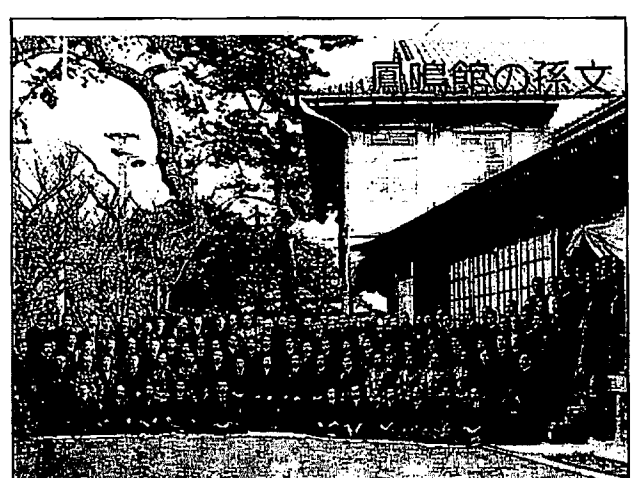
長崎三菱造船所埠頭

唐人屋敷跡の福建会館

現在の福建会館

2001年
上海から贈られた
孫中山銅像を設置

鳳鳴館の孫文

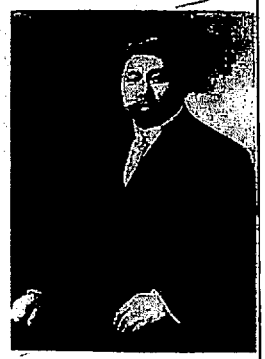


黄興と長崎

1909年1月13～15日
宮崎滔天と長崎へ

西郷四郎（姿三四郎）と痛飲

『ぶらぶら節』の芸者・愛八と？



柏文蔚と長崎

第二革命の叛乱首謀者　柏文蔚と李烈鈞

長崎に亡命者コミュニティ

- 1913年8月末～1915年5月
- 安徽都督柏文蔚は、長崎で亡命生活。
- 長崎にも21人（家族を含めると43人）の亡命者が集った。
- 李烈鈞の奥さんも長崎に滞在。長崎で李烈鈞と柏文蔚が会合を重ねた。

蒋介石と長崎

1913年9月
第二革命の失敗で長崎上陸
一週間ほど滞在し東京へ

1927年9月
雲仙温泉、小浜温泉へ（3泊）
この後、神戸へ
宋美齢との結婚の許しをもらうため

長崎華僑と「危険な」革命派の関係

- お尋ね者テロリスト時代の孫文には関係なし
- 権力者となった孫文は大歓迎（1913年）
- 第二革命に失敗した亡命革命派に支援なし
- むしろ袁世凱政権の誕生を祝う

- 権力、体制に迎合？
- 長崎領事館の直接的管理がゆきとどく

孫文と長崎の関連図書

- 『草莽のヒーロー 「無名の英雄・渡邉元」と東アジアの革命家』長崎新聞新書
- 『長崎が出会った近代中国』海鳥ブックス
- 『中国砲艦「中山艦」の生涯』汲古書院
- 『孫文と長崎』長崎文献社